

## 段ボールの歴史 が語るもの レンゴー尼崎工場

杭瀬南新町には、レンゴー尼崎工場があります。レンゴーは、段ボールの日本最古にして最大手のメーカーです。日本の段ボールの歴史は、レンゴーに始まり歩んできました。「段ボールと名づけて100周年。レンゴーの歴史は、そのままわが国の段ボールの発展史といえるものです。1909年（明治42年）、創業者・井上貞治郎はレンゴーの前身である三盛舎（後に三成社）を設立し、日本で初めて段ボールの事業化に着手。苦労を重ねやっとの思いで完成させた製品に、段のついたボール紙で語呂も良く覚えやすいとして「段ボール」と井上が命名したのがそのはじまりです。」（レンゴーHP）

もともと、尼崎工場は板紙メーカーのセッツ株式会社の所有でしたが、1999年に合併して、レンゴーの工場となりました。「当社は板紙でもトップメーカー（当時）になるとともに、名実ともに板紙・段ボールの一貫メーカーとしての地歩を固めました。合併に際しては、抄紙機の統廃合を行い需要に見合った新しい生産体制の構築を進め、業界全体の構造改革の先駆けとなりました。セッツとの合併を契機に、板紙・段ボール業界では再編が進み、需要に見合った生産体制が築かれていきましたが、一方で新世紀を迎え経済のグローバル化はますます進展し、地球環境保護意識の高まりにより、パッケージにも、省資源・省エネルギーを念頭に置いた環境負荷低減が求められるようになりました。」（レンゴーHP）とあります。

つまり、この合併は、当時過剰生産になっていた業界全体の再編の契機となる大きな意味合いを持ちました。さらに、右肩上がりの成長が望めない国内市場において、売れた分だけを作る受注生産体制を確立しました。加えて、古紙・板紙・段ボールの3業界が三位一体となって段ボールリサイクルシステムの基盤を固めることにより、100%リサイクル可能で環境に優しい循環型包装材である段ボールの環境性能はさらに高まりました。単に段ボールのトップメーカーというだけでなく、3業界全体のリーディングカンパニーとして、業界の活況や環境対策促進にその役割を果たした訳です。

私達の生活には不可欠な段ボールも、それはあくまで梱包材としての脇役、影の存在です。レンゴーの創業者である井上貞治郎が、苦心惨憺、試行錯誤のすえに段ボールをつくり上げたことも、殆ど知られていないところです。日本製の段ボールは網目が細かく、その強度は外国産の比ではありません。さらに確立されたリサイクルシステムも他国に類を見ません。私たちの生活は、そういった影の存在によって成り立っています。携わる先駆者や研究者、製造者の労をねぎらい思う時、1枚の板紙1箱の段ボールもまた特別なものに見えてきます。段ボールに限らず、身の回りの品々には、その数だけの歴史・歩みがあって、その恩恵のもとに私達は支えられています。知らずして、もののいのちと人のいのちは、重なっているのです。

転載資料 レンゴーHP

参考資料 ウィキペディア「レンゴー」

